太宰治全集

1

筑摩書房

太宰治全集第一卷

昭和四十二年四月五日初版第一刷発行
昭和四十三年十月三十日初版第七刷発行

著者　太宰治

發行者　竹之内靜雄

發行所　株式會社　筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
郵便番号　一〇一―九一
電話東京(二九一)七六五一(代表)
振替　東京　四一二三

印刷・三晃印刷
製本・鈴木製本

cs 70001

第一卷　目次

ロマネスク　一七
玩具　二〇一
陰火　二〇八
、めくら草紙　二三八

虚構の彷徨

道化の華　二四一
狂言の神　二九四
虚構の春　三二三

後記　三八一

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

太宰治全集

第一卷

晚

年

葉

撰ばれてあることの
恍惚と不安と
二つわれにあり

ヴェルレエヌ

死なうと思つてゐた。ことしの正月、よそから着物を一反もらつた。お年玉としてである。着物の布地は麻であつた。鼠色のこまかい縞目が織りこめられてゐた。これは夏に着る着物であらう。夏まで生きてゐようと思つた。

ノラもまた考へた。廊下へ出てうしろの扉をばたんとしめたときに考へた。歸らうかしら。

私がわるいことをしないで歸つたら、妻は笑顔をもつて迎へた。

その日その日を引きずられて暮してゐるだけであつた。下宿屋で、たつた獨りして酒を飲み、獨

りで醉ひ、さうしてこそこそ蒲團を延べて寢る夜はことにつらかつた。夢をさへ見なかつた。疲れ切つてゐた。何をするにも物憂かつた。「汲み取り便所は如何に改善すべきか？」といふ書物を買つて來て本氣に研究したこともあつた。彼はその當時、從來の人糞の處置には可成まゐつてゐた。

新宿の歩道の上で、こぶしほどの石塊がのろのろ這つて歩いてゐるのを見たのだ。石が這つて歩いてゐるな。たださう思うてゐた。しかし、その石塊は彼のまへを歩いてゐる薄汚い子供が、糸で結んで引摺つてゐるのだといふことが直ぐに判つた。

子供に欺かれたのが淋しいのではない。そんな天變地異をも平氣で受け入れ得た彼自身の自棄が淋しかつたのだ。

そんなら自分は、一生涯こんな憂鬱と戰ひ、さうして死んで行くといふことになるんだな、と思へばおのが身がいぢらしくもあつた。青い稻田が一時にぱつと霞んだ。泣いたのだ。彼は狼狽へだした。こんな安價な殉情的な事柄に涕を流したのが少し恥かしかつたのだ。

電車から降りるとき兄は笑うた。

「莫迦にしよげてるな。おい、元氣を出せよ。」

さうして龍の小さな肩を扇子でポンと叩いた。夕闇のなかでその扇子が恐ろしいほど白つぽかつた。龍は頬のあからむほど嬉しくなつた。兄に肩をたたいて貰つたのが有難かつたのだ。いつもせめて、これぐらゐにでも打ち解けて呉れるといいが、と果敢なくも願ふのだつた。

訪ねる人は不在であつた。

兄はかう言つた。「小説を、くだらないとは思はぬ。おれには、ただ少しまだるつこいだけであ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

る。たつた一行の眞實を言ひたいばかりに百頁の雰圍氣をこしらへてゐる。」私は言ひ憎さうに、考へ考へしながら答へた。「ほんたうに、言葉は短いほどよい。それだけで、信じさせることができるならば。」

また兄は、自殺をいい氣なものとして嫌つた。けれども私は、自殺を處世術みたいな打算的なものとして考へてゐた矢先であつたから、兄のこの言葉を意外に感じた。

白狀し給へ。え？　誰の眞似なの？

水到りて渠成る。

彼は十九歳の冬、「哀蚊」といふ短篇を書いた。それは、よい作品であつた。同時に、それは彼の生涯の渾沌を解くだいじな鍵となつた。形式には、「雛」の影響が認められた。けれども心は、彼のものであつた。原文のまま。

をかしな幽靈を見たことがございます。あれは、私が小學校にあがつて間もなくのことでございますから、どうで幻燈のやうにとろんと霞んでゐるに違ひございませぬ。いいえ、でも、その青蚊帳に寫した幻燈のやうな、ぼやけた思ひ出が奇妙にも私には年一年と愈々はつきりして參るやうな氣がするのでございます。

なんでも姉様がお婿をとつて、あ、ちやうどその晩のことでございます。御祝言の晩のことでございました。藝者衆がたくさん私の家に來て居りまして、ひとりのお綺麗な半玉さんに紋附の綻びを縫つて貰つたりしましたのを覺えて居りますし、父様が離座敷の眞暗な廊下で背のお高い藝者衆

とお相撲をお取りになつていらつしやつたのもあの晩のことでございました。父様はその翌年お歿くなりになられ、今では私の家の客間の壁の大きな御寫眞のなかに、おはひりになつて居られるのでございますが、私はこの御寫眞を見るたびごとに、あの晩のお相撲のことを必ず思ひ出すのでございます。私の父様は、弱い人をいぢめるやうなことは決してなさらないお方でございましたから、あのお相撲も、きつと藝者衆が何かひどくいけないことをなしたので父様はそれをお懲しめになつていらつしやつたのでございませう。

それやこれやと思ひ合せて見ますと、確かにあれは御祝言の晩に違ひございませぬ。ほんたうに申し譯がございませぬけれど、なにもかも、まるで、青蚊帳の幻燈のやうな、そのやうな有様でございますから、どうで御滿足の行かれますやうお話ができかねるのでございます。てもなく夢物語、いいえ、でも、あの晩に哀蚊の話を聞かせて下さつたときの婆様の御めめと、それから、幽靈、とだけは、あれだけは、どなたがなんと仰言つたとて決して決して夢ではございませぬ。夢だなぞとおろかなこと、もうこれ、こんなにまざまざ眼先に浮んで參つたではございませんか。あの婆様の御めめと、それから。

さやうでございます。私の婆様ほどお美しい婆様もそんなにあるものではございませぬ。昨年の夏お歿くなりになられましたけれど、その御死顏と言つたら、すごいほど美しいとはあれでございませう。白蠟の御兩頰には、あの、夏木立の影も映らむばかりでございました。そんなにお美しくていらつしやるのに、緣遠くて、一生鐵漿をお附けせずにお暮しなさつたのでございます。

「わしといふ萬年白齒を餌にして、この百萬の身代ができたのぢやぞえ。」

富本でこなれた澁い聲で御生前よくかう言ひ言ひして居られましたから、いづれこれには面白い因緣でもあるのでございませう。どんな因緣なのだらうなどと野暮なお探りはお止しなさいませ。

婆様がお泣きなさるでございませう。と申しますのは、私の婆様は、それはそれは粋なお方で、つひに一度も縮緬の縫紋の御羽織をお離しになつたことがございませんでした。お師匠をお部屋へお呼びなされて富本のお稽古をお始めになられたのも、よほど昔からのことでございましたでせう。私なぞも物心地が附いてからは、日がな一日、婆様の老松(おいまつ)やら浅間(あさま)やらの咽び泣くやうな哀調のなかにうつとりしてゐるときがままございました程で、世間様から隠居藝者とはやされ、婆様御自身もそれをお耳にしては美しくお笑ひになつて居られたやうでございました。いかなることか、私は幼いときからこの婆様が大好きで、乳母から離れるとすぐ婆様の御懐に飛び込んでしまつたのでございます。もつとも私の母様は御病身でございました故、子供には餘り構うて呉れなかつたのでございます。父様も母様も婆様のほんたうの御子ではございませぬから、婆様はあまり母様のはうへお遊びに參りませず四六時中、離座敷のお部屋にばかりいらつしやいますので、私も婆様のお傍にくつついて三日も四日も母様のお顔を見ないことは珍らしうございませんでした。それゆゑ婆様も、私の姉様なぞよりずつと私のはうを可愛がつて下さいまして、毎晩のやうに草双紙を讀んで聞かせて下さつたものでございます。なかにも、あれあの八百屋お七の物語を聞いたときの感激は私は今でもしみじみ味ふことができるのでございます。そしてまた、婆様がおたはむれに私を「吉三」「吉三」とお呼びになつて下さつた折のその嬉しさ。らむぷの黄色い燈火(ともしび)の下でしよんぼり草双紙をお讀みになつていらつしやる婆様のお美しい御姿、左様、私はことごとくよく覺えてゐるのでございます。

とりわけあの晩の哀蚊の御寢物語は、不思議と私には忘れることができないのでございます。さう言へばあれは確かに秋でございました。

「秋まで生き殘されてゐる蚊を哀蚊と言ふのぢや。蚊燻しは焚かぬもの。不憫の故にな。」

ああ、一言一句そのまんま私は記憶して居ります。婆様は寢ながら滅入るやうな口調でさう語られ、さうさう、婆様は私を抱いてお寢になられるときには、きまつて私の兩足を婆様のお脚のあひだに挾んで、溫めて下さつたものでございます。或る寒い晩なぞ、婆様は私の寢卷をみんなお剝ぎとりになつておしまひになり、婆様御自身も輝くほどお綺麗な御素肌をおむきだし下さつて、私を抱いてお寢になりお溫めなされてくれたこともございました。それほど婆様は私を大切にしていらつしやつたのでございます。

「なんの。哀蚊はわしぢやがな。はかない……」

仰言りながら私の顏をつくづくと見まもりましたけれど、あんなにお美しい御めめもないものでございます。母屋の御祝言の騷ぎも、もうひつそり靜かになつてゐたやうでございましたし、なんでも眞夜中ちかくでございましたでせう。秋風がさらさらと雨戸を撫でて、軒の風鈴がその度毎に弱弱しく鳴つて居りましたのも幽かに思ひだすことができるのでございます。ええ、幽靈を見たのはその夜のことでございます。ふつと眼をさましまして、おしつこ、と私は申しましたのでございます。婆様の御返事がございませんでしたので、寢ぼけながらあたりを見廻しましたけれど、婆様はいらつしやらなかつたのでございます。心細く感じながらも、ひとりでそつと床から脫け出しまして、てらてら黑光りのする欅普請の長い廊下をこはごはお厠のはうへ、足の裏だけは、いやに冷や冷やして居りましたけれど、なにさま眠くつて、まるで深い霧のなかをゆらりゆらり泳いでゐるやうな氣持ち、そのときです。幽靈を見たのでございます。長い長い廊下の片隅に、白くしよんぼり蹲くまつて、かなり遠くから見たのでございますから、ふゐるむのやうに小さく、けれども確かに、確かに、姉様と今晩の御婿様とがお寢になつて居られるお部屋を覗いてゐるのでございます。幽靈、いいえ、夢ではございませぬ。

藝術の美は所詮、市民への奉仕の美である。

花きちがひの大工がゐる。邪魔だ。

それから、まち子は眼を伏せてこんなことを囁いた。

「あの花の名を知つてゐる？　指をふれればぱちんとわれて、きたない汁をはじきだし、みるみる指を腐らせる、あの花の名が判つたらねえ。」

僕はせせら笑ひ、ズボンのポケットへ兩手をつつ込んでから答へた。

「こんな樹の名を知つてゐる？　その葉は散るまで青いのだ。葉の裏だけがぢりぢり枯れて蟲に食はれてゐるのだが、それをこつそりかくして置いて、散るまで青いふりをする。あの樹の名さへ判つたらねえ。」

「死ぬ？　死ぬのか君は？」

ほんたうに死ぬかも知れないと小早川は思つた。去年の秋だつたかしら、なんでも青井の家に小作爭議が起つたりしていろいろのごたごたが青井の一身上に振りかかつたらしいけれど、そのときも彼は藥品の自殺を企て三日も昏睡し續けたことさへあつたのだ。またついせんだつても、僕がこんなに放蕩をやめないのもつまりは僕の身體がまだ放蕩に堪へ得るからであらう。去勢されたやうな男にでもなれば僕は初めて一切の感覺的快樂をさけて、鬪爭への財政的扶助に專心できるのだ、と考へて、三日ばかり續けてP市の病院に通ひ、その傳染病舍の傍の泥溝の水を掬つて飲んだもの

ださうだ。けれどもちよつと下痢をしただけで失敗さ、とそのことを後で青井が頻あからめて話すのを聞き、小早川は、そのインテリ臭い遊戯をこのうへなく不愉快に感じたが、しかし、それほどまでに思ひつめた青井の心が、少からず彼の胸を打つたのも事實であつた。

「死ねば一番いいのだ。いや、僕だけぢやない。少くとも社會の進歩にマイナスの働きをなしてゐる奴等は全部、死ねばいいのだ。それとも君、マイナスの者でもなんでも人はすべて死んではならぬといふ科學的な何か理由があるのかね。」

「ば、ばかな。」

小早川には青井の言ふことが急にばからしくなつて來た。

「笑つてはいけない。だつて君。さうぢやないか。祖先を祭るために生きてゐなければならないとか、人類の文化を完成させなければならないとか、そんなたいへんな倫理的な義務としてしか僕たちは今まで教へられてゐないのだ。なんの科學的な說明も與へられてゐないのだ。そんなら僕たちマイナスの人間は皆、死んだはうがいいのだ。死ぬとゼロだよ。」

「馬鹿！　何を言つてゐやがる。どだい、君、虫が好すぎるぞ。それは成る程、君も僕もぜんぜん生產にあづかつてゐない人間だ。それだからとて、決してマイナスの生活はしてゐないと思ふのだ。君はいつたい、無產階級の解放を望んでゐるのか。無產階級の大勝利を信じてゐるのか。程度の差はあるけれども、僕たちはブルジョアジイに寄生してゐる。それは確かだ。だがそれはブルジョアジイを支持してゐるのとはぜんぜん意味が違ふのだ。一のプロレタリアアトへの貢獻と、九のブルジョアジイへの貢獻と君は言つたが、何を指してブルジョアジイへの貢獻と言ふのだらう。わざわざ資本家の懷を肥してやる點では、僕たちだつてプロレタリアアトだつて同じことなんだ。資本主義的經濟社會に住んでゐることが裏切りなら、鬪士にはどんな仙人が成るのだ。そんな言葉こそウ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo